巻　頭　言

校長　　稲葉　尚幸

この『水脈（みなみ）』と名付けられた研究紀要が創刊されたのは、昭和５９（1984)年３月、開校２年目のことでした。二代校長田代芳男先生による命名で、「（知的障害児）教育は地下の水脈を求めて掘削するようなもので、掘れども掘れども水の出ない虚しさを感ずることも多いが、ある日突然湧水（水が地下からわき出ること）して欣喜雀躍（躍り上がって喜ぶこと）することもある。一人ひとりの研究を集大成して地下水脈の全容が明らかになるように願ってやまない。」（『水脈』創刊号「創刊のことば」）との思いが込められています。初期の特別支援教育の困難さと、これから特別支援教育を充実させていこうとする気概が感じられる言葉でもあります。以来その思いは脈々と受け継がれ、来年度（令和４(2022)年度）に創立 40 周年記念事業を控えたこの年に、節目となる第 20 号を発刊できることを、本校の歴史を引き継ぐ者の一人として、大変うれしく思います。

前号である第 19 号が発刊されたのは平成３１（2019）年２月でした。本号は、その後積み重ねてきた３年間にわたる研究の成果をまとめたものです。これまでの紀要が全てそうであったように、この第 20 号もそれが書かれた時代を背負っています。

まずは、学習指導要領が改訂されたことです。小学部が令和２(2020）年度から、中学部が令和３(2021)年度から、高等部が令和４(2022)年度から年次進行で段階的に適用となりました。特別支援学校における今回の改訂の基本的な考え方は、次のとおりです。

（１）社会に開かれた教育課程の実現、育成を目指す資質・能力、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた指導改善、各学校におけるカリキュラム・マネジメント

（２）障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園・小・中・高等学校の教育課程との連続性を重視

（３）障害の重度・重複化、多様化への対応と卒業後の自立と社会参加に向けた充実

中でも学校教育現場において早急な対応が求められたのが、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」と「主体的･対話的で深い学び」です。これは本号の中心テーマでもあるので、詳細は本文に譲ります。

次に、全世界的な大流行を見せる新型コロナウイルス感染症の社会的な影響です。日本においても令和２(2020)年１月に感染者が確認されて以来、周期的に感染拡大を繰り返し、社会全体に新型であるが故の不安とダメージを与える事態となりました。学校においても、感染防止のため、様々な活動制限を余儀なくされました。具体的には、臨時休校、分散登校、短縮日課を始め、校外活動や外部講師依頼の見合わせ、校内においては対策の基本となるマスクの着用、手洗い・手指消毒の徹底、密閉・密集・密接の回避、換気などです。それらに起因する様々な制限がある中で、感染症対策と学びの保証の両立を目指して、職員は知恵を絞り、相談し合いながら、毎日と向き合ってきました。そしてそれは第６波の最中にある現在も続いています。文には表立って現れないことではありますが、そのような中で研究を止めることなく、執筆・編集の労と向き合った職員、並びにそれらの職員をサポートしてきた本校の全職員をねぎらいたいと思います。

最後に、「なぜ私たちは、教師と呼ばれ、教師で在り続けることができるのか？」ということについて、改めてこの場で問い直してみたいと思います。結論から言えば、答えはこの紀要の中にあります。それは、単に「専門知識があるから」とか「教員免許を持っているから」ではありません。日々児童生徒の実態と将来を見据え、教育の普遍性と時代性の双方を意識しながら、常に自ら学び、考え、試み続ける存在であるからこそ、教師で在り続けることができるのだと思うのです。その証しがここにあります。「水脈」を探し続ける姿勢こそが、私たちの存在理由であり、矜恃でもあるのです。

本号の研究については、まだ不十分な点が多々あることと思います。今後、更に実りのあるものに発展させていくために、多くの方に御高覧いただき、御意見、御助言、御指導等をいだければ幸いです。